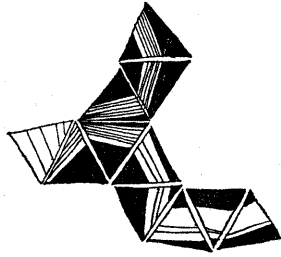


近代短歌に現われた子ども (十二)



大塚 雅彦

(25) 柳原白蓮

白蓮は本名燁子、東京の麻布桜田町に明治十八年十月、伯爵柳原前光の妾腹の子（戸籍上は次女）として生まれた。生母おり、よりは柳橋から出ていた芸妓で、もとをただせば幕末の遣米使節となった幕府の外国奉行、新見豊前守正興の娘である。白蓮は九才にして北小路随光の養女となり、明治三十三年華族女学校を中退してその子資武と結婚（十六才）し一子功光をあげたが、三十八年に離婚し実家に戻った（功光氏は現在、京都府宇治市に居住、私とは一時、同じ短歌結社「樹木」に属していた歌人である）。四十二年、東洋英和女学校に入学、四十三年卒業。四十四年春二十七才にして、当時九州の炭鉱王といわれた五十二才の伊藤

伝右衛門と再婚し、福岡県の幸袋（現飯塚市に属す）のいわゆる「あかがね御殿」に住み、その美貌と才筆とで「筑紫の女王」とうたわれた。

ところが大正十年、公開絶縁状を夫につきつけて伊藤家を出奔して去り、吉野作造博士の門下で「新人会」に属する若き社会運動家の東大生宮崎龍介の処に身を寄せた。龍介が雑誌「解放」の記者として白蓮の戯曲を刊行すべく彼女を訪い、恋が生まれていたのである。白蓮の叔母（前光の妹）愛子は宮中に入り「柳原一位の局」といわれ、大正天皇の御生母であり、白蓮は天皇のいとこにあたる。そのような女性があるうに夫を棄てて七才年下の社会主義の学生のもとに走ったのであるから、世間は驚倒し、囂々たる非難が集中、兄前光は貴族院議員を辞職し、彼女は黒髪を切られ実家に監禁された。世にいう「白蓮事件」であるが、この「日本のノラ」（松永伍一『火の国の恋柳原白蓮』昭34・11）を当時の女性評論家のほとんどが非難した中で、中条（宮本）百合子だけが、理解と同情の立場に立った（永畑道

子『恋の華・白蓮事件』昭57・11）という。二年の後、龍介と正式に結婚し二児を得たが、結婚後もしばらくは、彼女は病弱な夫を扶けてもの書きをしつつ、女の細腕で生活を支えた。しかし、長男香織は太平洋戦争に早大在学中の身で学徒出陣により出征し、鹿屋基地で戦死した。戦後の彼女は宗教的世界に関心を持ち、平和運動に奔走し、「国際悲母の会」を結成したり、「世界連邦建設同盟」の婦人部長となって、日本各地や中国等を行脚し、活動を続けた。昭和四十二年二月逝去、八十一才。遺骨は相模湖の裏側の山中の顕鏡寺に亡児香織の骨と一緒に葬られた（永畑道子、前掲書）。遺族として長女蓼子さんが婿（早大教授の理博宮崎智雄氏）を迎えて、後を継いでいる。

彼女は、十才頃から養父随光に短歌を学んだという。明治三十三年佐佐木信綱門に入り、四十四年頃より再びその添削を受けたらしい。昭和十年から歌誌「ことたま」を主宰し晩年に及んだ。処女歌集『踏絵』（大正4）により彼女は一躍有名になったが、その後『幻の華』

(大正8)、『白蓮自選歌集』(大正10)、『紫の梅』(大正14)、『流轉』(昭5)、『地平線』(昭31)等の歌集を刊行。その他、『几帳のかけ』(大正8)のような詩集、『筑紫集』(昭3)のような詩歌集もある。また、小説『荊棘の實』(昭3)や、戯曲『指藝外道』(大正9)等もあり、多彩である。

白蓮は竹柏園の同門であった九条武子とよく併称された。それは共に妾腹の子ながら、白蓮が伯爵家という堂上華族の出であり、武子が西本願寺法主大谷光瑞の妹という身で、共に高貴の出自でありながら、結婚しても武子が長く空閨を守り、白蓮もまた不幸な結婚をくり返すという風に家庭運が悪く、この数奇な運命をたどった艶麗の二人の閨秀歌人に世人が強い関心や同情を持ったこと、共に信綱門の才媛であったこと等によるものであったろう。実際に二人は仲もよく、親しい交遊関係もあった。しかし決定的に違ったことがある。それは武子が夫との生活や子どもに恵まれず、むしろ社会奉仕、こんにちの社会福祉活動に挺身して、そのさなかに若くして病

没したのに対し、白蓮は前半生は兎も角、後年、大正デモクラシーの世潮に乗り得た好運もあって、思想も境遇も異なる夫を得て幸せな家庭人としての生活を勝ち得て(もつとも息子の戦死という不幸は続いたが)長寿を全うしたことである。また、その歌風も著しく異っている。その悲愁を作歌によって支えたような点は共通性を感じさせるが、武子の歌が『金鈴』『薰染』『無憂華』等の歌集や歌文集等に見る如く典雅で、憂愁にみちたもので、敬虔な信仰や諦念の中に運命を見つめている点があるのに対し、白蓮の作品は烈しく情熱的で、「明星」的ロマンチズムに溢れている。師の佐佐木信綱は『踏繪』の序文に「深刻にかつ沈痛なる歌風」と書いており、「抑圧された生活の中で自我に目ざめんとしつつ脱皮に至る一步手前の呼吸が、異常な緊迫感をたたえ」(『和歌文学大辞典』五島茂担当、昭37・11)ている風がある。晩年の歌風は平明さを加えた面があるが、やはりロマンチズム的な抒情のこり、要するに一言にしていえば、白蓮の詠風は「前近代的ロマンチックな歌風」

『近代短歌辞典』昭25・6)ということになる。

私は生前の白蓮に二度逢っている。その頃私は数人の国文学者たちと作った「近代詩歌懇話会」というのに属し、仲間と共に著名な詩人や歌人等を歴訪して回顧談を聴くことを続けていたのであるが、東京・目白の宮崎家を訪うたのは昭和三十八年三月十六日と十一月十九日で、聞き書きをとった(拙稿「柳原白蓮聞書」歌誌「地表」昭38年11月〜39年1月号所載)。白髻の美しい龍介翁に逢うことも出来たが、白髪のみごとな白蓮女史にその波瀾万丈の生活史をうかがい、楽しい半日をすごした。彼女は華族の出身とは思えないザックパランな、むしろ下町のオカミさん風の率直な話しぶりで何でも気軽に話してくれた。既に緑内障で失明状態であったが、私たちが仲間の只一人の女性詩人の身体全体を手で確認するかのようになんごろに撫でさすった。「ああ、触覚で訪問者を記憶にとどめようとするこういう人間の確認のしかたもあるのか」と私は深く感動したのをおぼえている。

①ふた親の情けをしらぬわれながら子のためによき母

となる日よ

②汽車のおもちゃつみ木の山の次々に吾が膝もとをめぐる雨の日

①は歌集『紫の梅』より抄出。白蓮は前述の如く側室の子であり、公卿の家の里子制度に従って生れて間もなく品川の鈴ヶ森近くの種物屋に預けられて保育された。そのような父母の愛情を知らぬ生い立ちをした自分が今幸せな結婚して、わが子のためには良き母となろうとしている、というのであろう。彼女の苦労した境涯を知ると共感できるものがある。歌人の川上小夜子は「烈しい恋愛をする人は又母性愛も強いらしい。恋愛のつぎに来るものは子供に対する母性愛である。この作者にも母の歌が可なり沢山にある」(新興出版社版『近代短歌講座』第三卷、昭25・12)と述べている。②は歌集『流轉』より抄出。歌意は明白で、子どもの玩具が膝もとに溢れている、という母親の喜びをうたっている。初期の『踏繪』のあの強烈な恋愛感情をうたいあげて、自我に溢れた奔放な詠風にくらべると別人の歌のような感がある

が、幸せにみちた家庭に恵まれ、母子一体の真情をうたった彼女の後年の作風は「金魚うり子がききつけて門の戸の鈴うちならしいでゆく足音」等にも現われており、世間を震撼した事件の主人公の彼女もまたやさしい母親であったことを示している。それだけに後の愛児の陣歿は痛ましく、昭和二十年八月十一日、つまり敗戦の僅か四日前の「香織戦死す」の一連は「母は好きとほほにより来し子のぬくみふと思ひいづる日向ぼこして」等、哀切なものをふくんでいる。

(26) 五島美代子

本名は美代、明治三十一年七月東京の本郷で生まれた。父は動物学者の理学博士五島清太郎ごとうで当時旧制一高の教授（後に東大教授）であった。大正十二年、文検合格、十三年東大文学部の聴講生となる。十四年石樽いすく茂（歌人石樽千亦の三男）を五島家に迎え結婚。十五年長女生誕。昭和四年、夫の大阪商大助教赴任と共に大阪に転住。六年に夫の留学に伴い長女を連れて渡英、二年

間の欧州生活を経て八年帰国。十二年次女出生。十八年母の後を承けて晚香女学校々長となる。二十四年専修大文学講師、翌年教授となる（四十三年まで）。二十五年長女急逝。四十三年札幌大学教授となる（空路出講）。五十三年四月十五日、胃潰瘍、肝硬変で逝去、七十九才であった。

美代子は大正四年佐佐木信綱門に入った。昭和三年当時流行の唯物史観の影響を受け「新興歌人連盟」に加盟、「心の花」脱退。四年夫の茂や前川佐美雄と共に歌誌「尖端」を創刊したが半年で廃刊。プロレタリア歌人同盟にも加盟したが、間もなく脱退。八年、外国より帰った後「心の花」に復帰。十三年、夫の茂と共に歌誌「立春」を大阪で創刊。戦時中は歌誌統合で他誌と合併したが、二十一年「立春」復刊、夫と共に主宰編集して晩年に至った。歌集は『暖流』（昭11）、『丘の上』（昭23）、『風』（昭25）、『炎と雪』（昭27）、『いのちありけり』（昭36）、『時差』（昭43）、『垂水』（昭48）、『花激』（昭53、歿後の刊）等すこぶる多い。また、『赤道圏』

(昭15)、芸術院賞候補となった『母の歌集』(昭28)、読売文学賞を受賞した『新輯母の歌集』(昭32)、『そらなり』(昭46)等の自選歌集も多い。『五島美代子全歌集』(昭38・11短歌研究社)もあったが、更に最近、夫君茂氏編の劃期的な『定本五島美代子全歌集』(昭58・4短歌新聞社)が上梓された。

彼女の歌壇内外での活躍も著しく、昭和十年代の注目すべき歌集『新風十人』(昭15)に参加、戦後は「朝日歌壇」選者(昭30-53)を長くつとめたり、歌会始選者をしたり、皇太子妃の作歌指導役をしたりした。女流歌人の集団によって創刊(昭24)された「女人短歌」初期の編集同人もした。日本ペンクラブ、日本文芸家協会の会員でもあった。『婦人のための短歌のつくり方』、『私の短歌』等の啓蒙書的な著述もある。若い頃はマルクス主義的な新興思想に動かされたが、後年の動きは上述の如くで、かなり振幅が多かった歌人であるといえよう。なお、夫君の五島茂氏(経済学博士、欧州経済思想史専攻、ロバート・オウエンの研究者として著名)も現役歌

人で、現代歌人協会理事長などした歌壇の重鎮である。

彼女は「母の歌人」として定評があった。史上多くの女流歌人が母子関係をうたって来てはいる。しかし「子供を題材にした作品は数多いのだが、母そのものを追求したものは、ほとんどない。……その〈母〉を短歌にとりこんだ先駆者ともいうべき女流歌人」(尾崎左永子)『女人歌抄』昭58・1)と美代子は評価されている。川田順が『暖流』の序文で述べているように、古来女性の恋愛の歌や夫婦愛の歌は数がすこぶる多く佳吟も少なくないが、「母性愛の歌に至っては量も質もいちじるしく劣る」のに、美代子の歌が「全く新しい母性愛の発露がたくさん見られる」もので「美代子さんは……母性愛の歌によって、前人未踏の地へ、すこやかに第一歩を踏み入れた」ものであった。しかも後に愛児の自死という逆縁のかなしさをも体験し、母親の悲哀をも痛烈に味わいつくした。彼女自身も「あしかけ三十年のあいだの私の最大の関心はわが子であった。従って子を対象にした歌は私の全作品の過半数を占めている」(『母の歌集』あとが

き)と告白しているが、「母となつて三十年の歳月に、氏は母性の短歌をきわめた」(上田三四二『現代歌人論』昭44・12)ということになるであらうか――。

①胎動のおほにしづけきあしたかな吾子の思ひもやすけかるらし

②この日頃うるほひ深む吾子の瞳にをとめうごきてあやぶきものを

③乳呑児と百日こもれば小刀の刃にもおびゆることろとなれり

④ひたひ髪吹き分けられて朝風にも言ひむせぶ子は稚なし

①は歌集『暖流』より抄出。「胎動」一連の中にある。

「おほに」は、何の気なしに、おおよそに、の意。ふと気付くと胎動が何がな静かな感じの朝だ、胎中の吾が子の思いもまた私と同じように安らかであるらしい、というのであろう。始めて母となる身の深い思いを湛えた一首であり、胎動というものをうたった珍らしい作品である。「我ならぬ生命の音をわが体内にききつつこころさ

びしむものを」という歌なども一連の中にある。②は歌集『丘の上』より抄いた。「童女と胎児」一連の中にある。すなわち、長女ひとみ(このとき十一才)と胎児(次女・いずみ)の両方が素材とされている一連であり、「ひそやかに母により来て胎内のはらからにと吾子のもいふらしも」という歌が続いている。抄出歌は、童年期を脱して少女に向う長女の瞳に、うるおいが深まりをとめ心のような鋭いものが早くも動くような気配がして、心配しながら母の自分はずっと見つめる、という微妙な母情を詠出している。「ものを」の「を」は感動を現わす助詞で、『暖流』に「少しづつもの解き初めし子の前に母とおかれてまどへるものを」がある。③も『丘の上』所収で「支那事变勃発」の題があり、昭和十二年(一九三七年)の時局が背景にうたわれている。この年五月八日、作者は次女を出産した。七月七日に蘆溝橋事件で日中戦争が始まり、八月には上海でも両軍が衝突し、暗黒の時代に進んでゆくが、作者は産後嬰兒と約九十日間臥床にあつてこの慌しく緊迫した時世を意識してい

る。そして、もしや生れた吾が子にも不幸が及ぶのではないかという母親の本能のようなものがひらめき、小刀の刃にもおびえるような気持ちにさせられるというので、女性ならではの心情をこめた鋭い一首である。④も『丘の上』所収。この「子」は当時満二才くらいの次女である。朝風にひたいの上の髪を吹き分けられ、もの言い咽んでいる幼児を描き、これまたすぐれた作だ。

⑤うつそ身は母たるべくも生れ来しをとめながらに逝かしめにけり

⑥わが胎にはぐくみし日の組織などこの骨片には残らざるべし

⑦白百合の花びら蒼み昏れゆけば拾ひ残しし骨ある如し

⑧亡き子来て袖ひるがへしこぐと思ふ月白き夜の庭のブランコ

⑨子をうみしおぼえある身にひびき来て吾子のみごもりいや深むころ

作者は昭和二十五年一月、愛する長女ひとみ（東京女

高師を卒業し、東大在学中）を亡くした。しかも自殺だった。これは作者の身を裂くような絶望的な出来事だった。⑤⑥⑦はその折の悲痛をうたったもので歌集『風』

にある。妻となり母となるべかりし身を処女のまま死んだ子を悼む⑤や、子の遺骨を抱き、この子を胎において、かなしいロマンを湛えた挽歌⑦の慟哭。この折の亡児詠にはすぐれた作品が多くまさに絶唱といえよう。⑧は歌集『いのちありけり』所収。月明の夜の庭に亡児が袖をひるがえしてこいでいるかとかの間思うブランコ。作者はその後くり返し尽きることなく、幽明境を異にした子をうたっている。⑨は歌集『時差』所収。次女いづみは昭和三十八年七月女兒を出産したが、その直前頃の作であろう。娘が子を産む、祖母となる私がかつてその娘を産んだのだと思い、娘の産み月の迫るのを自分のことのように感じている——祖母・娘・孫の三代の女の系譜のつながりの生理をうたい上げた珍らしい歌で、男性である私も不思議な感銘を与えられるのである。